

文化の風が吹くまちちくしの

# 文化薫道

## ◆其の四十九 川の名前

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず…」の書き出しで有名な鴨長明の『方丈記』は、とどまることのない「川」の流れを人生に例えています。

「川」の名前もまた、この例えのように時代や場所によって移り変わっています。10月15日号でも少し触れましたが、江戸時代には同じ川でも村ごとに呼び方が違っていました。



御笠を流れる宝満川

『筑前国続風土記拾遺』は、現在の宝満川の名称について、永岡付近では「柴田川」、常松付近では「関屋川」、天山村の項では「柴田川」、下見村の項では諸田から西小田にかけて「トキ川」と呼ばれている、と記しています。

これが、明治初期の『福岡県地理全誌』では、天山、下見、西小田、若江、諸田、常松、永岡、牛島、阿志岐、吉木、香園、大石、本道寺、柚須原の13村の記述が「宝満川」に統一されており、中央集権化や富国強兵などの政治・軍事の理由から名称の統一が進められたと考えられます。

それでも明治33年に陸軍が作った地図は「得川(宝満川)」と併記が残り、名称の変更には時間がかかっている様子がうかがえます。モノや情報、文化の通り道であるとともに、飲料水や農業用水として生活に深く関わる川の名前の変更は、すぐには地域の人々に受け入れられなかったのかもしれない。

問い合わせ先／文化財課

